

結婚式の誓い と 浮気の疑惑

結婚式の日の
誓いを
思い出して！

まつだつま

浮気を疑い、
夫の後をつけた主人公が、
見たのは若い女と密会現場

若い女の正体をつきとめ、
主人公は愕然とする。

目次

浮気の疑惑	1
浮気の現場	2
夫の浮気相手	6

浮気の疑惑

誓いの言葉

- 1、互いに嘘、いつわりなく誠実であること
- 2、互いの両親、友人を大切に思うこと
- 3、互いを信じ合い、助け合い、愛し続けること
- 4、互いに出来る限り今の体型をキープすること
- 5、ケンカをしても、すぐに仲直りすること
- 6、今日の日の感謝を一生忘れないこと

わたしは、三年前の結婚式でゲストの前で誓った言葉を湯船に浸かりながら、繰り返し呟いていた。しかし、呟くのは三回目の途中でやめた。だんだんと腹が立ってきてしまった。

「バカみたい、イライラする」そう言って湯船から飛び出した。

バスタオルで体を拭きながら、たるんできたお腹をつまんでみた。間違いなく体重が増えてきている。ストレスのせいで甘いものをよく食べるようになった。体重計に乗るのが恐ろしくて今日もやめた。

わたしは何のために結婚したんだろう。週に五日他のスタッフに気をつかいながらパートで働き、パートから帰ってからは掃除、洗濯、夕飯の支度に追われ、家計のやりくりで頭を悩ませる。

夫の隆司が、ラクしているように思えて腹立たしい。今日も残業で帰りが遅くなるとメールがあったが、仕事かどうか怪しいものだ。わたしは隆司が浮気をしているのではないかと疑っている。それもわたしのイライラの原因のひとつだ。

浮気を疑う理由は、残業で遅く帰宅した時に、微かだが、フワッと香水のカオリがするからだ。そのカオリは、わたしも愛用してたことのある香水のカオリなので、間違いなく女のカオリだ。

問題はそれが、いつ、どこで、ついたかだ。通勤電車の中でついたなら、毎回、同じカオリがつくはずがない。職場でつく可能性も十分に考えられるのだが、それも残業した日だけというもおかしい。

それからもう一つ、隆司が急に優しくなったのだ。もともと隆司は、無器用で気配りなどできるタイプではなかったのに、最近、自ら夕食の後片付けをしてくれたり、お風呂の掃除やトイレの掃除までしてくれるようになった。無愛想で会話をする方ではなかったのに、よく話しかけてくるようになった。それも遅く帰った日は、特にだ。本当は嬉しいことだけど、男は浮気をしていると妻に優しくなる、と聞いたことがある。

いつかは、この疑惑をはっきりさせたいと思っている。

浮気の現場

わたしは今、コーヒーショップにいる。ティータイムを楽しんでいるわけではない。今日、隆司から残業で遅くなるとメールが届いたので、わたしは、浮気の疑惑をはっきりさせるために行動を起こすことにしたのだ。

このコーヒーショップから道路をはさんだ所に建つビルの五階に隆司の働く会計事務所がある。

わたしは窓際のカウンター席に座り、そのビルのガラス張りの自動ドアを腕組みをして睨みつけるように見ていた。

結婚前は、よくこの席に座り、隆司があこのビルの自動ドアから出てくるのを、両肘をつき手の甲を顎にあて、胸をときめかせながら待ったものだ。隆司が自動ドアから出てきて階段をトントントンと降りる姿が見えたら、口元が勝手に緩んだ。信号で待っている姿を見ると笑顔になった。信号を渡りコーヒーショップに近付くにつれて、わたしの笑

顔は全身へと広がっていった。隆司がコーヒーショップに入ってきてコーヒーを注文すると、わたしはボックス席へと移動した。そして隆司がわたしの席まで来てコーヒーをテーブルに置き、笑みを浮かべわたしの前に座る。グレーのブレザーに黒いズボン、ネクタイにもこだわらない、いつも地味な隆司だが、わたしにはキラキラと輝いて見えた。

「お待たせ」

「うん」

「結婚式、もうすぐだな」

「うん、わたし、ちょっと緊張してきたわ」

「幸せになろうな」

いつもこんな会話からはじまった。世界一幸せだと思っていた。

あの時、わたしがよく言った言葉がある。

「三年後も五年後も十年後も二十年後も一生、わたし達は幸せにしてるかな」

すると、隆司は必ず、こう返した。

「当たり前だろ」

そして、わたしはこう言った。

「本当！ それじゃあ、まずは、わたし達の三年後が見てみたい」わたしが満面の笑みを浮かべると隆司は、少しはにかんで笑った。

あの時のわたしが今のわたしを見たらショックだろうなど、ため息が出た。わたしは、自動ドアから一度視線を外し、コーヒーをひと口飲んでコーヒーカップに視線を落とした。すると、視界の端に人影をとらえたので、慌てて視線を戻した。隆司が自動ドアから出てきて、数段の階段を軽やかに跳ねるように降りる姿が見えた。わたしは三年前のような笑顔になれるはずはなかった。やっぱり残業ではないんだ。わたしはガクリと首を垂れた。隆司は階段を降りて人目を気にするように左右を見てから、右側に歩きだした。帰り道とは反対の方向だ。

わたしは急いでコートを手にとり、半分以上残ったコーヒーを返却口に置いて、コーヒーショップを飛び出した。

四車線の道路を挟んで、右斜め前を歩く隆司を見失わないように追いかけた。バスやトラックが往来し、わたしの視界から隆司の姿を奪う。隆司がドンドンわたしから離れていくように感じた。隆司は二つ目の交差点で立ち止まり、また後ろを見てから、右にスーっと姿を消した。交差点の信号を見たら青信号が点滅をはじめていた。ウワァーと

喉の奥から変な声をあげ、全力疾走で信号まで走り、赤になりかけた横断歩道を一気に渡りきった。渡ってから息が切れて足がガクガクした。ラーメン屋の立て看板に両手をつけて肩で息をしながら隆司が消えていった方向に視線をやった。

二車線の道路の両側には店舗が連なる賑やかなところだ。手前にラーメン屋がありその隣に洋菓子店、本屋と続く。反対の通りにはお弁当屋、眼鏡店などが並ぶ。お弁当屋に立つ若い女性店員と目が合った。学生のアルバイトだろうその店員は、目が合った瞬間、幽霊でも見たかのように大きく目を見開いて、わたしから目をそらした。わたしはそんなに恐ろしい顔をしていたのだろうか。

奥にもずっと店舗が並んでいるようだが、通りの奥に行くにつれて、すこしずつ寂れていく感じだ。ただ人の通りは少なくなっていくが車の往来は多そうだ。

ずっと先に隆司の姿を見つけた。隆司は腕時計を見てから、周りをキョロキョロしている。誰かと待ち合わせをしているのだろうか。こっちに顔を向けたので、わたしは踵を返し、首をすくめた。その後、恐る恐るゆっくりと振り返ってみると、嫌な光景が目飛び込んできた。隆司の前に若そうな女が立っていたのだ。隆司と女はそこで立ち話をしていた。女の姿は隆司の陰に隠れて、はっきりとは見えない。

「どういうことよ？」と隆司のところまで走って行って、ひっぱたいてやろうかと思ったが、その勇気はなかった。

浮気の現場を押さえてしまったのかもしれない。胸がバクバクした。胸を押さえて深呼吸を繰り返した。仕事の関係かもしれないじゃない、と自分に言い聞かせ落ち着かせた。

すると隆司と女は、人の気も知らずに、そのまま目の前の喫茶店に入ってしまった。

「えーっ、ちょっと待ってよ」

吐く息だけで、声にならない声でそう言いながら喫茶店の前まで走って行った。

喫茶店の前まで来たが、中に入る勇気はなかった。

喫茶店のどっしりとした木製のドアがドーンと門番のようにわたしの前に立ちはだかっていた。このドアが隆司と女の邪魔をさせないよう、わたしを見張っているように感じた。ドアを蹴飛ばしてやりたかった。喫茶店の前に飾ってある色褪せ、埃をかぶったピラフやカレーの食品サンプルが、今のわたしの心のように思えた。

ここから動く気になれないが、どうすることもできない。喉がカラカラなので、道路を挟んだところの酒屋の横にある自動販売機でペットボトルのお茶を買うことにした。

温かいお茶を一口飲むと、少しだけ気持ちが落ち着いた。フッーと白い息を吐いて、ペットボトルを胸の前で両手で握りしめ手を暖めた。三月でも日が暮れるとまだまだ寒い。コートのポケットに手を突っ込んで足踏みを繰り返した。心と体はどんどんと冷えていった。

ペットボトルのお茶の温かさは、すでになくなっていた。スマホで時間を確認すると、ここに来てから三十分が経っていた。木製のドアは頑固に沈黙を続けていた。

一時間経って、やっと木製のドアがカランカランと音をたてゆっくりと開いた。

女が出てきた。少し離れている上に、マフラーをしてうつむいているので顔が見えない。コソコソして泥棒猫のような女だ。そのすぐ後ろから隆司が出てきた。わたしは、慌てて酒屋の前に駐車してあった軽トラックの陰に隠れた。そっと軽トラックの荷台から顔を出し二人の様子を伺った。

隆司と女は喫茶店の前で話をしていた。わたしは耳をそば立てたが、離れているので二人の会話はわたしの耳には届かなかった。

会話はすぐに終わった。隆司は右手を上げ、敬礼のポーズをしていた。わたしとつきあっていた頃、別れ際にするいつもの隆司のポーズだ。女は小さく手を振っている。その様子を見て、わたしの嫉妬心が頂点に達した。軽トラックの窓にわたしの顔が映る。その顔は鬼のようになっていた。

隆司は来た道を帰っていった。女は反対方向へと歩いていった。喫茶店だけで別れたのだから、ただの仕事の打ち合わせだよ、と自分に言い聞かせたが、敬礼のポーズをとっていたのが、どうも解せない。

わたしは女の後を追いかけた。女は左側の歩道を早足で歩いていく。後ろ姿を見る限り、若くてスタイルもいい。悔しくて涙が出そうになった。女はどんな顔をしているんだろうと足を早めた途端、女はスッと左に曲がってしまった。

わたしは慌てて信号を渡ろうとしたが、信号が赤に変わってしまった。地団駄を踏んで赤信号を睨んだ。信号の赤い光がわたしの目を冷たく刺した。わたし達夫婦が赤信号なのかもしれない。

車が途切れた瞬間に赤信号を無視して渡り、女の曲がっていった道へと走った。

街灯の少ない薄暗い道に入った。ひっそりとしていて、女の姿は見当たらない。

わたしは早足で道の奥へと進んで行った。右側には緑色の高いネットが立ちはだかっている。学校のような。ネットの向こうには、シンとしたグラウンドが広がっている。手前にはサッカーのゴールがあり、一番奥には野球のバックネットが見える。校舎の一階に小さな灯りが見えた。

道の左側は工場が三軒ならんでいたが、どこもシャッターが閉まっていた。一軒だけシャッターの横のドアから灯りが漏れ、二階の窓を見上げると、そこから灯りが見えた。人の気配を感じ、少しだけほっとした。

時々、風が吹き抜ける。その度に工場のシャッターが鈍い金属音を響かせて、学校のネットは波をうって揺れた。

そのまま道の突き当たりの川の土手まで来た。川沿いに走る道を左右に覗いてみたが、女の姿はない。道沿いに行儀よく植えられた桜の木が寒々しく見えるだけだった。一ヶ月先の天気の良い昼間にここを歩けば、淡いピンクの花と青い空を見て、心も晴れやかになるんだろうなと思った。わたしは桜の木を見てから、深く呼吸をし空を見上げた。群

青色の空に輪郭のはっきりした満月が見えた。この満月だけがわたしの見方をしてくれてるように思えた。満月の灯りがなければ、ここはもっと暗い道だろう。

最近空を見上げる余裕もなかったなと満月を見上げながら思った。満月はわたしに向かってやさしく笑ってくれているように見えた。満月の中に、結婚前にわたしに向けてくれた隆司の笑顔が浮かんだ。わたしも満月に向かって笑顔に向けた。気持ちがスーッと落ち着いていくのを感じた。

その時だった。強い風が吹いてわたしの背中を押した。体が飛ばされそうなくらいの強い風だ。足を踏ん張り、体を屈めている時に、背中から人の気配を感じた。

「ウフフ」と女性の笑い声が風の音といっしょに耳に届いた。その声にわたしの背筋は凍りついた。

その後も「ウフフ、ウフフ」という不気味な笑い声が何度も聞こえてくる。

わたしは、恐る恐る、ゆっくりと首をまわした。後ろを向いた瞬間、突風がわたしの顔面に突き刺さった。わたしは顔をそらし目を閉じた。

その時、フワーッとあの香水のカオリが鼻をくすぶった。あの女だ。慌てて目を開けたが女はいない。辺りを見回したが誰もいない。

目に飛び込んできたのは、この道に入る前に渡ってきた横断歩道の青信号の光だった。青信号の光が早くこっちに来てと叫んでいるように思えた。わたしは恐ろしくなり、青信号に向かって一目散に走った。

夫の浮気相手

家に帰ると、隆司はすでにリビングのソファに体を預けてくつろいでいた。

「ただいま」

隆司の顔を見ることが出来なかった。

「おかえり、どうしたの、どこか出掛けてたの」

隆司が体を起こして、わたしの顔を覗きこんできた。

「えっ、あー、隆司もおかえり。う、うん、ちょっとね、ちょっとね。近所の人とね。すぐに夕飯の準備するわね」

「いいよ、疲れてるだろうから、今日は外に食べに行こうか。それとも、俺が夕飯作ろうか」

隆司は笑みを浮かべ、いつも以上に優しい声で言った。最近は何よりも優しい。それを素直に受け入れられない。

「う、うん、じゃあ、外に食べに行きましょうか」

「なに？ 元気ないな。熱でもあるのか」

隆司がわたしのおでこに手をあてようとした。

「だ、大丈夫」わたしは隆司の手を払った。

それから二人で外食した。隆司は、わたしのお気に入りのハンバーグの専門店に行こうと言ったが、そんな気にはなれなかったので近くのラーメン屋で済ませることにした。

隆司はチャーシュー麺とチャーハンを注文し、わたしはラーメンだけを注文した。美味しいラーメンのはずだが半分以上残した。喉に通らなかったし味もわからなかった。

食べている間、隆司はずっと明るく話しかけてきた。わたしが元気がないことを気にしているようだったが、わたしは、ぎこちないままだった。今日のこと、女のことが気になった。しかし、隆司から聞き出す勇気はなかった。

はじめて母親に隆司を紹介した時のことを思い出した。

「誠実そうで、優しい人じゃない。こういう家庭的な人だと、お母さんも安心だわ」わたしもそう思っていた。今もそう思いたい。

隆司が女と会っているのを目撃してから数日が過ぎた。その間、隆司とわたしの会話はギクシャクしたままだった。

そして、また残業で少し遅くなるというメールが届いた。今日こそ、あの女の正体をつきつめてやる。別れることになるかもしれないが、その覚悟を決める時だ。このままモヤモヤと過ごすのは、お互いのためにならない。わたしは着替えをすませて家を出た。

前と同じようにコーヒーショップで待っていると、隆司が会社から出てきた。

前と同じく隆司は帰る方向とは反対の右側に歩いて行った。そして二つ目の交差点を右に曲がって行った。

わたしは隆司を追いかけて、交差点を右に曲がると、ちょうど隆司と女が喫茶店に入るところだった。わたしは、また酒屋の前で待つことにした。今日も頑固な木製のドアは、一時間沈黙を続けた。その間、かじかむ指先に息を吹きかけ続けた。

一時間後、ドアがカランカランと音をたてて開いた。ドアの隙間から隆司と女が出てきた。

「隆司、どういうこと。この女は誰よ」と二人の前に立ち声を荒げる勇気は持てなかった。こっそりと二人の様子を伺った。隆司と女が向かい合って立って、何やら言葉を交わしている。

隆司が女に向かって、「妻とは別れるから、しばらく待ってくれ」とか言ってるんじゃないかと思うと重い気持ちになった。

最後に隆司が敬礼のポーズをし、女が手を振る姿を見て、また頭に血がのぼった。

隆司は来た道に戻っていく。女は反対の方向に歩いて行く。ここからホテルへ向かう様子はない。少しだけ救われた気持ちになった。隆司の後を追うべきか、女の後を追う

べきか一瞬悩んだが、女の歩いて行く方向へと足は向いた。

今回は見失わないように、先に信号を渡った。女と少し距離をおいて、女の背中を睨みながら追いかけた。女は前と同じ角を曲がったので、わたしは急いで角まで走って行った。角に着いてから薄暗い道を見渡した。

しかし、どういうわけか、今日も女の姿はなかった。わたしは学校のグラウンドと工場のシャッターを交互に見ながら走って道の奥へと歩いて行った。

女はどこに消えてしまったんだろう。また突き当たりの川の土手まで来たが、やはり女の姿はなかった。

空を見上げたが、月は見えなかった。風が強く桜の木が大きく揺れていた。月の明かりがなく風が強いせいで、この前より暗くて不気味に感じた。川の土手を上がってみた。川を覗きこむと、昨日と今日の雨のせいで水の流れは激しかった。ザーザーと激しく音を立てる川の流れを見ていると、体が飛ばされそうなくらいの強い風が吹いた。

強い風を顔面に受け髪をなびかせながら、その場でしばらく立っていた。わたしは一体何をしてるんだろう。悲しくて涙が止まらない。瞳からこぼれ落ちる涙が風で飛ばされていく。そのまま風に身を任せ目を閉じた。スゥーッと意識が遠のいていく感じが心地よかった。このまま前に倒れたら、わたしの体は川の流れにのみ込まれるだろう。それでもいい。

その時、風に乗ってあの香水のカオリが鼻をついた。そして、背中から女の声が聞こえた。

「あんた、何してんの」

わたしは、はっとして目を開けた。振り向くと女の靴が見えた。昔わたしが好きだったブランドの靴だ。今、わたしを苦しめている女が目の前にいる。恐る恐るゆっくりと顔を上げた。女の腰が見えた。細くくびれている。胸元が見えた。今のわたしとは違う女性らしい体型をしている。

この女はどんな顔をしているのだろうか。女の顔を見ようと、恐る恐るゆっくりと視線を上げた。

女の顔を見た瞬間、わたしの体が震えだして思うように動けなくなった。叫びたいが声も出なかった。

「あんた、しっかりしなさいよ」

「あ、う、……」言葉が出ない。

「あんた、結婚して幸せなの？ 隆司、悲しそうだったよ」

「あ、う、……」

「隆司はね、自分に甲斐性がないせいで、あんたとは、うまくいってない。そう言ってたわ」

「あ、……」

「あんたね、隆司の気持ち考えたことある？ 隆司は結婚してから、あんたが元気ないからすごく悩んでんの。わかってる？」

「う、……」

「あんた、自分だけが不幸だ、なんて思ってたんじゃないでしょうね」

「えっ、……」

「隆司はね、あなたを幸せにしようと必死なんだからね」
「ど、……」
「なんとか言いなさいよ」
「ど、どういうこと？ あ、あなたは、だ、だ、だれ」
　　やっと声が出た。
「わたし？ 何よ、わたしが誰だかわかってるんでしょ」
「う、うん、わ、わかる。た、たぶん」
　　声が震えた。体の震えも止まらない。
「ふん、たぶんじゃないわよ。わかってるわよね」
「う、うん」
「何よ、元気ないわね。情けないな、元気出さないよ」
「う、うん、ごめんね、わたし」
　　涙が止まらなくなった。
「そう、わかってるわね。わたしは三年前のあなたよ」
「な、なぜ？」
「なぜって、三年後のわたしが幸せにしてるのか期待して見にきたのよ。そしたら、何よ、このざま。ほんと、あんたバカね」
「そんなに偉そうに言わないでよ」
「偉そうにも言いたくなるわよ」
「なんで、隆司と会ってたの」
「だから、三年後のわたしが幸せなのか、隆司に確認したかったのよ」
「隆司はなんて？」
「あんたが幸せそうでないのが辛って言った」
「そ、そう」わたしは俯いた。
「そう、じゃないわよ」
「だって……」
「隆司は、あんたがどうしたら幸せになれるか、わたしに相談してたのよ」
「それで、なんて？」
「どうしたらいいかっていうからさあ、隆司は不器用で無愛想だから、少しはそこを改めて、家事を手伝ってあげたり、会話を楽しむようにしたらってアドバイスしたけど、うまくいかなかったみたいね。あんたが悪いのよ」
「わたしだって、一生懸命、やってるわよ」
「なんか、体もぼてっと太っちゃって、服もだらしないし、化粧もしてないじゃない。あなた女を捨ててるの」
「あなたには、わからないわよ。主婦は大変なのよ。パートで働かないとやっていけないし、家事もやらないといけないし、自由な時間もお金もなくなるのよ。結婚すると、あなたみたいに気楽に暮らせなくなるの」
「ふーん、じゃあ、わたしが隆司との結婚を取り止めようか？ そしたら、あなたも自由に生きていけるわよ。それでいいの？ 隆司と別れていいの」
「そ、それは、嫌。隆司との子どもがほしい」

「じゃあ、隆司はあんたのこと愛してるんだからさあ、もっとあんたも隆司を愛しなさいよ。隆司はあんたの為に頑張ってるわよ。浮気を疑う前にそれに気づいてあげなさいよ」
「隆司も何も言ってくれないし、あなたとコソコソ会ってるからいけないのよ」
「あんた、隆司の性格、わかってんでしょ。そんなこと言って自分を正当化しないでよ」
「わたし、どうすればいいんだろう？」
「あんた、ほんと馬鹿ね、結婚式で誓ったんでしょ。それを忘れないことよ」

誓いの言葉

- 1、互いに嘘、いつわりなく誠実であること
- 2、互いの両親、友人を大切に思うこと
- 3、互いを信じ合い、助け合い、愛し続けること
- 4、互いに出来る限り今の体型をキープすること
- 5、ケンカをしても、すぐに仲直りすること
- 6、今日の日の感謝を一生忘れないこと

結婚式の誓いと浮気の疑惑

著 まつだつま

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
